

房総の月とうた

―「蛙の笛」に誘われて―

三木 紀人

こんにちは。三木でございます。この研究センターが出来ました二〇〇一年から「文学史と房総」という連続講座を行って来ました。たまたま私は日本文学を専攻しておりましたので、その立場を利用して開始したのがこのテーマだったわけです。

七年目の今年度は、「歌ころと房総」、歌と房総の結び付きというところで、できれば幅広く、歴史的に古代から現代までを分担の形で話題にできたらいいなと思ひまして。話し合いをしながら、結局四回という枠の中で、今司会をやっております岡田さんが中世のちよつと渋いと申しましようか、まだ専門家も注目していないような珍しい話題の、歌と房総の結び付きについて佐倉を中心にお話しました。それから、近世については中国人の樂殿武さんが得意分野の一つである漢詩、漢文とこの房総の地の結び付きということに関して八鶴湖を中心としたお話をしてくれました。それから、明治、大正ということ、前回は門脇さんが竹久夢二を中心として、絵と歌、そして個性的な天才の生と死といったようなことをお話してくれたのではないかと思ひます。

だんだん時代が進んで、今日はその最終回ということで、大正、昭和、その時代の中で房総と歌がどういう結び付きを示してきたかというよう

な方向でお話いたします。

今日お配りしました資料にありますように、初め予定していたタイトルと変わってしまいました。最初は「蛙の笛」という、「昨年「里の秋」で扱った齊藤信夫さんの作品をもう一つということ考えていたんですけども、もしかしらたら話が広がりそうだと思ひつつ、タイトルに手を入れました。

「蛙の笛」というのは後で聞いていただきますけれども、月夜の蛙の声を歌った、えもいえない、とてもすてきな歌です。歌われているのは、房総の広い世界の中で、生まれて間もない、みずみずしい、おびただし蛙が鳴いている風景です。

具体的には昭和二十一年四月一六日の体験に基づくということが斎藤さんのお書きになったエッセイに出てきます。まだオタマジャクシから蛙になって間もない蛙が元氣よく鳴き始めた。それを耳にしたおりの思いがもとなつているそうです。前年の敗戦の折に、教職に就いておられた齊藤さんは、自分のこれまで行ってきた仕事について反省し、子どもたちを間違つた方向に育ててしまったとお考えになつていたようです。これは本人の責任でも何でもなくて、国策に沿つてということになりますけども。とにかく自分のこれまでのいろいろしてきたことを反省しながら、三月の末をもつて教職を退かれたそうです。さあ、これからどうしていいか分からない、どう生きていったら自分を取り戻せるかという心境に追い込まれたときに、四月の一六日に蛙の声を聞いて、ああ、大丈夫だ、まだ自分は生きていけそうだ、あの蛙たちのように元氣よくこれから立ち直ろうと思ひ直した。そういう彼の再生への氣分をかき立ててくれたのがそのときの蛙の声だったという。そういうきっかけ

であの歌はできたんだそうです。非常に心に染みる歌です。

二〇〇一年に私が生まれて初めて房総のこの地に来て、ここで働くようになったときに、やっぱり最初の強烈な印象は、空の広さと、平野の広さと、それから生き物たちのさまでした。蛙の声は四月の何日かは覚えていませんけどもやはり学校の帰り道に聞きながら、ぼうぜんとしました。こんなに蛙の声を一齐に聞くのは一体何年ぶりだろう、この前はいつだったかなどと思いながら、帰り道を急ぎました。

その体験を、同じ年に一緒に着任したフランス人の偉い先生に話したところ、どうも僕らフランス人は蛙の声を聞くと食欲を刺激されて、おなかぐうぐう鳴りますと言われたので、私は、なるほどそういうものかと思ったものです。蛙はフランス料理の食材の一つで、蛙の声を聞くとおなか鳴るといのは、相当われわれと文化が違うということの一つですね。六年前のことですけども非常に印象が鮮やかに残っています。蛙の声を聞くと、われわれ日本人はそれに関する詩や和歌のあれこれを思い出すこともあります。日本の文化伝統の中で蛙が一体どういう位置付けになるのか、そのフランスから来た先生は、日本文学に通じておられる方ですが、そんなことは関係なく、多分蛙を使った高級レストランの食事を思い出したのかもしれない。彼はすぐ忘れたかと思いますが、私にとっては、この大学に来たときの一つの懐かしい思い出になっています。

今日、そんな思い出を交えて月夜の蛙の歌を扱おうと思っているうちに、ふと思ったのは、その歌にたまたま月夜が出てくるだけではなくて、房総に関わる童謡・唱歌の類によく月が出てくることです。全部がそうだとはいえ切れませんが、私の思い出す歌はおおむねそうです。「証

城寺の狸ばやし」、それから「浜千鳥」とか、それから今日、後で取り上げる「月の沙漠」など。

それから、古典文学の中で最初に房総の風景が具体的に出てくるのは『更級日記』ですけども、これも、歌ではありませんが、月と房総の結びつきの一例になるかもしれません。『更級日記』は幼いころにここで少女として自我に目覚めた人が、その後、都に帰ってからどういいう経験をしたか、その中で自分がどう変わったか、変わらなかったかという、そういうことをつづつて、最終的に月と向かい合いながら自分の現在、過去に添って月と一緒にわが身を照らし出すという、そういう作品です。題名は、ご承知のように、月の名所にちなんでおり、そのいわれは作品の末尾に明かされていますが、それに対して、冒頭間もなくのところにも月が出ております。彼女がそれまで過ごした地を出発したのが九月三日、そして一五日、いわゆる後の名月の夜に「いかだ」という所に泊まります。あいにくその日は土砂降りだったものですから月が見えなくて、月夜の房総の風景はその日に関しては出てこないですけども、翌々日、一七日の記事に月見に触れる強烈な思い出が語られています。ある意味では、『更級日記』は「月と房総と私」という、そういう結びつきをめぐって作られた一つと言って言えないこともないと思います。

さらに、歴史的に『更級日記』に次ぐものは何かというと、鴨長明です。今日の資料に、鴨長明の若いころの歌を引いておきました。これは何年前前にこの講座で具体的に取り上げましたので、そのときおいでだった方は覚えていらつしやるかもしれません。「海上月」といって、非常に広い水平線を見ながら、海上に昇っていく月を歌った歌です。具体的には今のいわゆる犬吠埼の東方を歌っているんです。このころはま

だ犬吠埼という名前はなかったようですが、「三崎」と呼ばれていた。「みさき」というのは固有名詞、地名のようでもあり、普通名詞のようでもあり。取りあえず陸地の先端部を御先、先っぽの先と同じで、それを神聖視して「御先」という。三浦半島の先端にも三崎と呼ばれる所があり有名です。

鴨長明の時代は、この辺に大きな荘園があつて、京都の九条家のものでした。鴨長明は九条家に仕えていた下流貴族です。歌人の藤原定家もそうでした。九条家の持つている荘園のあるこの房総の三崎の辺りがどんなふうかということを実際に見てきた人がいて、その人たちがどんなにその辺の月夜が絶景であるかなんていうことを話題としたことがあつたんだと思うんです。それを都で聞いた鴨長明が、こんなふうだろうかと想像をめぐらせて歌つたのがこれです。彼は実際に観察して歌つたわけじゃなくて、あくまでも人づてに聞いた犬吠埼辺りの海上に月が浮かびあがつていくときの鳥肌が立つような風景を彼は歌つたわけです。

そういう『更級日記』や鴨長明の歌などから眺めていくと、大正、昭和期の歌の中に常に房総とゆかりの歌によく月が出てくるだけではなくて、伝統的にそうだったんだということに思い到り、房総で働いている一人としていつかまた、あらためて問題として取り上げてみたい気がします。

それはそれとして、ここで取りあえず、さつきお話しした「蛙の笛」という歌について、もしかしてご存じない方があるかもしれないので、ちょっとビデオで見えていただきたいと思います。短い歌ですので、すぐ終わります。

(ビデオ)

この歌は後で紹介しますので、ちょっと前もって聞いていただきます。

(ビデオ)

お話を戻しますと。今の月夜の蛙の歌とかなりイメージ的に重なるものがいろいろあるなど準備段階で思いつつ、まず思い浮かべた「月の沙漠」の方に段々気持ち傾いて行つてしまつて、結局今日はそれをメインとして、蛙には申し訳ないんですけども、月夜の笛を思わせる蛙についてはまた別の機会にということにさせていただきます。

「月の沙漠」という歌は、もちろん子ども用の歌のように思われていまずけども、実を言うと子どもよりも大人、それも女性よりも男性に深く愛されている傾向があるのではないかとということが、今回の調査の中で判明いたしました。それはなぜか、その元になった力がこの歌のどこに秘められているのかということについて、今日お見えになった男性一人一人にインタビューさせていたいただきたいような気持ちもあります。勿論そんな余裕がないので諦めます。この歌が大好きだという人が結構いらつしやるかと思えます。

正直言つて私はそんなにこの歌に心を引かれていたわけではなくて、さつきの「ばあやを訪ねて」のほうがずっと好きだと思ひ込んでいましたが、だんだん調べているうちにこの歌は実はすごい歌だということが分かつてき始めました。まだまだ奥があるだろう、その背景にいろいろなことがありそうだと思います。今日はそれにいささか触れる中間報告みたいな感じの話をさせていただきます。

この歌に惹かれた人たちの例として、一番私に強烈な印象を与えたのは、たまたまテレビ局に働いている人から聞いたこぼれ話ですけども、破滅型の芸人で横山やすしという漫才師がいたのを記憶でしょうか。

この人の逸話です。彼は昭和五〇年代のいわゆる漫才ブームのときの代表的ヒーローとして知られた人です。相方が選挙に出て議員になってしまい、いわば置き去りにされて、だんだん没落して行って、心身ともに悲惨な晩年を送った破滅型の芸人です。

渥美清さんなどと並ぶ昭和期を代表する偉大な芸人ではないかと思いますが、生活者としてはとんでもない人で、わがままで、やんちゃで、乱暴者で、口の悪い人でした。酩酊した状態でリアルタイムのテレビ番組に生出演して不始末をしかしたことがありまして、私はそれを見ていましたけれども。そんな話をしてるとまた時間がなくなりそうです。(笑)

その横山やすしが、時折酔いに任せて仲間に行ったことに、自分にとって一番これから経験する中できついのは、かわいがっている娘の結婚式の夜だと言いつつ、披露宴の中で必ずおれは「月の沙漠」を歌うって言ったそうです。自分にとって娘の結婚というのは、あの歌の中のお姫様。その娘を取っていく新郎が王子。その二人が遠い遠い沙漠の中をはるか彼方に後ろ姿を見せて消えていくのが、自分にとって娘の結婚だ。それをその披露宴で歌い、親としてのスピーチをしようと書いていたそうです。結局それは実現しなかったそうですけどね。実現する前に彼は亡くなったのか、そうでなかったけど人に止められたのか、話してくれた方はご存じありませんでした。そういう話が放送界に残っている、いかにも彼らしい、放送界では彼のことをやっさんと言うらしい

ですけど、やっさんらしいゴシップだねって言って、そんな話をしては彼を懐かしむ人々が少なからずいる。その一人から流れ流れたうわさ話のようです。

もう一人は森繁久弥さん。もう既に九〇代半ばになっている、昭和二〇年代から活躍している俳優で歌手でもあるあの方が「月の沙漠」をことのほか愛していたそうです。彼が主演した中で一番長いこと続いた昔のテレビ番組で、「七人の孫」というのがあったんだそうです。私はあまりテレビドラマを見ないものですが、名前を知っていたけど残念ながら見たことがないのですが、それが十何年続いてついに終了した打ち上げの夜に、スタッフ約一〇〇人でホテルの一室を借りて打ち上げをやったときに、最後に「月の沙漠」をみんなで合唱するということがあったらしいんです。一〇〇人が何度も何度もこの歌を繰り返し歌いながら、全員がぼろぼろ涙を流し、よくもこんなに流す涙があるねってお互いにあきれあうほどに皆大泣きをしたんだそうですけど。そういうこぼれ話が伝わっています。

これは今日の配布資料に使いました久世光彦さんの『マイ・ラスト・ソング』という本の「月の沙漠」の章に出てくる話です。詳しくはそれをお読みいただければと思います。

ついでながら触れますと、この『マイ・ラスト・ソング』というのは、人生があと五分で終わるといふときに、最後に死んでいくおまえさんの耳元で何か一曲聞かせてあげると言われたら何をリクエストするかという、そういう歌を扱った本です。その中で、一人ひとりの人柄が浮かび上がってくるそのラスト・ソングをを扱いながら、昭和時代を生きてきた自分たちがこれらの歌を通して何を体験し、何を学んだかという、『諸

君!』という雑誌に連載されたエッセーです。その中に当然「月の沙漠」も出てきて、さっきの「七人の孫」の打ち上げパーティーにおける全員号泣した合唱の話が出てまいります。

そのほか、あの人もこの人もという感じで、この歌をめぐる思いを語る男たち、中高年の男たちという一つのパターンがありまして。ひよつとしたらこの中にもいらつしやるかなと思いつながら、一方ではそんなはずがなくて、今日この歌を取り上げるといことは予告していなかったもので、当然どなたもご存じないんだから、ここにはあまりいらつしやるないかもしれません。

さて、この歌のどこにそういう力があるのか、この歌のどこに彼らは引かれつつ生きてきたのか。さらに、生きてきた人生の果てに何が見えしてきたのか。それから、その一人一人にとって死とは何か。今、どの辺にその死が迫っているか。などということが気に掛かります。

ちなみに、久世光彦さんという人はその『マイ・ラスト・ソング』の連載が終わって何年も生きることがなく、一昨年亡くなりました。さつき見て頂いたテレビ番組で歌を歌っておられた川田正子さんという方も一昨年に亡くなってしまわれ、同世代の一人である私としては、大変淋しい思いをしております。

実を言うと、数年前、ここに川田さんと久世さんをお招きして、昭和期を回想し、にぎやかに、またしみじみと話し合うというような企画ができないものか、ちょっと考えたりしたことがあったのですけれども、あつという間に二人消えてしまって、残ったのは自分だけということになってしまいました。

さて、その「月の沙漠」がいかなる歌かというところ、歌詞からたちどこ

ろに風景が見えてくるとも解りやすいものです。その風景は、解りやすいけれども、実際にはどこにもなさそうな、実際の沙漠と歌の中の沙漠とは相当隔たりがあつて、これを作った加藤まささんを、それからメロディーを付けた佐々木すぐるさんも、沙漠を見たことがあるかどうか、おぼつかないのです。見ていけば、こんな歌はできないかもしれない。こんな歌はできないということは、要するにこの歌の魅力、美しさは、沙漠を作り手が知らない故にできたものだとということになると思います。これは、体験と詩、現実と文学の世界の関係を考える上でちょっと面白いヒントを含んでいるとも言えます。

歌の中の沙漠と実際の沙漠とが相当違うということは、ちょっと子細に考えれば誰でも気づく事実ではないでしょうか。「旅の駱駝がゆきました」。これはいいとしても、その乗っているのが王子とお姫様。身分のあるこのカップルが何で従者や護衛の人を伴わずに、二人で月夜の晩に沙漠を通っていくのか。一体どんな事情によるのでしょうか。

それから、ラクダはかなりさまざまぐれで乱暴な乗り物だそうですから、乗りこなすにはそれなりの経験と技術が必要でしょう。この二人がその条件を満たしているのかどうか。なぜラクダに乗って移動しなければならぬのか。「とぼとぼ」という印象を与える旅なのはなぜか。もしある目的でどこかに駆け落ちをしようと逃げていくのなら、もっと違う乗り物を使ったほうがよさそうなんだけれども、何でラクダに静かに乗っていったって、しかもとぼとぼという旅姿なのか。

「月の沙漠」で想像しているラクダと実際のラクダが天と地ほど違う。というようなことを、実際に沙漠地方にテレビ番組の取材に行ってみずから経験した知人がいるものですから詳しく聞いてきました。

その人はたまたま荷物に余裕があったので、砂漠の砂を記念に持って帰ってきて、それを今日貸してくれましたので、これからお返ししますからご覧ください。赤茶色をしていて相当イメージとは違うと思いますけど、この歌から思い描かれる砂はもつと白い感じではないでしょうか。しかも手触りが意外に粗い。これが砂漠地帯特有の風圧で視界いっぱいにすさまじい勢いで流れ、広がるときはどんなふうだろうか。もちろん目も開いていられない。鼻を通して体の中にどんどんこんなものが飛び込んできたら、一人人間はどうなるのかという、非常に恐ろしい感じをかき立てるような砂。ちよつとご覧の上、お確かめ下さい。

さて、歌の中の二人は「金と銀との鞍おいて、二つならんでゆきました。乗った二人はおそろいの白い上着を着てました」とあります。「白い上着を着てました」というところとか、それがおそろいであるという辺りがとても心に残るところです。

ここに白という色が繰り返して出てくるから、この風景は基本的にこの白で構成されているということがあらためて印象付けられます。本当の砂漠は赤っぽいんですけども、想像上の、日本人が理解している砂漠は白です。それから、月光は白い色と意識されていますから、上空の月、地上の砂漠、そして移動していく二人の白装束の男女、王子と姫、それぞれ真っ白ということになります。

このただならぬ白の組み合わせは何を主として呼び覚ますか、どういう意味があるのかということを考える上では、お手元の資料の左の例えば「白の含むもの」という、高橋治さんという映画監督出身の作家、芥川賞を取った方ですけども、この人の文章が示唆してくれるはずですので、見ていただければと思います。神聖なイメージとか、あるいは永遠

とか無とか、あるいは時に死を連想させるものです。どうもこの風景の中には死への傾斜が目立っているようだがということが、この「白い上着を着てました」。さらに、その二人は合意に基づいて白い色で表されている死の世界に向かっていくようでもあり、何やらただならぬ二人ということになりそうですね、

「金の鞍には銀の甕、銀の鞍には金の甕」。これは歌を聞いていますと甕なのか亀なのか分からなくて。子どもは大体この歌詞から、この二人とともに亀が移動している、小動物の亀が移動しているというふう読み取るみたいです。ついこの間、『朝日新聞』の日曜版でしたか、「朝日歌壇」の選者の佐佐木幸綱さんが、そういう幼児体験を懐かしんだある人の作品を紹介しておりました。小さいころに、自分はこの歌を歌いながら、あるいは聞きながら、あの二匹の亀はその後どうなっただろうか、大丈夫だったのだろうか。王子とお姫様よりも亀のことが気になって気になってという、そういう日々を自分自身で懐かしんでいる歌が紹介されています。これは歌としては完成度がそんなに高くないけども、自分としてはとても懐かしい、共感させられる歌なのでちよつと紹介だけしておくという特別扱いで、佐佐木さんはその歌を引いておられた。

子どもの歌の歌詞の理解というのはそういうのがありますね。浦島太郎の「帰ってみればこはいかに」という部分を、子どもは怖いカニがいたんだって誤解しがちです。浦島太郎が帰郷したらびっくりしちゃった、怖かったって、そういうふう読んで、「こはいかに」という古語を知らない子どもたちは怖いカニ、恐ろしいカニというふうに思いこむ。向田邦子のエッセーにある、「野中のバラ」というのを相当大きくなるまで自分は「夜中の薔薇」というふうに思っていたという似たよう

なケースに触れる有名なエッセイも思い出されます。

そういう誤解、誤読に基づく歌詞理解は結構それはそれで面白いし、実際にはない、またはありえないし、作者が思ってもいなかったような間違ったイメージを受け取る読み方のほうが、ある魅力を感じさせないこともない。現実にはここに二匹の亀が縛られていて、何かその縛られている亀にある意味があり、それには宗教的な象徴の意味か何かがありそうだとかというふうな想像を広げていくと、実際にはこれは亀ではなくて麴なんですけども、案外面白い方向にこの歌詞の読解を誘っていくかもしれないと思ったりしました。それで、その佐佐木さんの文章を今日この資料の中に入れてよかったです、気が付いてみたらその新聞を家族の者がちり紙交換に出しちゃった後だったので間に合わなかったのです。もしどなたかお持ちでしたら、ぜひお貸しいただければと思います。ついこの間なんですけど。二週間ぐらい前でした。

さて、脱線した話を元に戻します。「金の鞍には銀の甕、銀の鞍には金の甕。曠い沙漠をひとすぢに、二人はどこへゆくのでしょうか」。この「どこへゆくのでしょうか」というのが一つのさわりかと思うんですけど、ここで初めて作者がこの歌を歌う人、あるいは読む人に向かって呼び掛けた。それまでは淡々と風景と移動している二人をスケッチしていたのが、急にこちらに向かっただけに行くんでしよう、どう思います？ というふうな問い掛けてくる。こちらはドキッとするわけです。ドキッとさせられながら、またそのことに基づいて、そう言われているこの自分も、一体これからどこへ行くんだらうか、さらにはどこから来たんだらうかという、あの人類の普遍的な命題と申しましようか、例えば鴨長明やゴーギャンなどの名文句で知られる人間の存在について

での一番根源的な問い掛けも連想させられてきてる、「二人はどこへゆくのでしょうか」というフレーズは読み進めていて心に残るものがあります。

それについての理解を深めるためには、この詩の作られたときが大正一二年であることに注意する必要があるかもしれません。この年の九月一日に関東大震災があり、関東大震災とは何だったんだろうということへの理解の中で、当時のジャーナリズムないし論壇を支配していた共通認識は、これは偶発的なことではない、天が自らの意思に基づいて日本人に警告を与えたのだという、そういうような論調が多かったようです。ヨーロッパが大戦とその前後の難しい時代を送っていたのをよそに、しばらく繁栄を誇って、無自覚であり続けた日本人が、もう少し気持ちを引き締めて、自分がどう生きていくか、これから何をどうするべきかということを再認識させるために、天が自らの意思に基づいて日本人に与えた警告があの大災害だったということが当時の心ある人々の間でしきりに論じられていたわけです。

その中にこの詩を作った人も、それからこの歌に何かを感じた人たちも含まれていたと考えています。全く自分と無関係の、遠い遠い世界の、現実じゃないと言い切れそうなこの二人の行方と同様に、歌っている自分たちも、一体これからどうなっていくのか、どこに行くのかということ意識しつつこの歌を聞いたり歌ったりしていたのではないかと。いうことを考えると、「二人はどこへゆくのでしょうか」という問い掛けの行方と広がり、範囲は相当程度広そうだし、それはまた、一つの時代を超えて、いつの世の人々の内部にも反響を広げていったのではないのでしょうか。その例にはさつき言いましたような横山やすしの娘への思い

やら、それから「七人の孫」に集結して、もう再び巡り合うこともないかもしれない。〇〇人のスタッフも入ることでしょう。彼らは、離散していく前に、今後自分はどうなっていくんだろうと漠然と思っていたのが、この歌を通してあらためてはつきりとした形で迫ってきて、一人一人が万感迫る思いを抱いていたので、号泣の大合唱になっていったのだと思います。「二人はどこへゆくのでしょうか」。われわれも一体これからどこへ行くのでしょうか。また新たな大震災が迫っているような予感や予報もありますから、大丈夫なんだろうか、死はすぐそこまで来ているんじゃないだろうかとか、いろいろなことを考えながらいるときに、この歌はまた特別なインパクトを持って迫ってくるようです。

さて、この歌詞には「二つの瓶は、それぞれに紐で結んでありました」ともあります。この「結ぶ」という言葉のは、この二人が何かで固く連れ携している、つながっているということと、そのつながりを通して二人はほかのいかなるものも受け入れない、排他的な姿勢を採り、すべてを排除しながら二人だけの小世界を共有していて、その小世界がここから遠い遠いはるかかなたに移動していく。その環境が砂漠であって、一体それはなぜだろうということも気になります。

歌詞にはその次に、「朧にけふる月の夜を」となっていますが、湿度の高い日本ならともかく、砂漠地帯で朧月夜というのはあまりなさそうな気がするんです。もしそう見える風景があったとしたならば、砂嵐によって月の輪郭が見えにくい、ぼやけているのであって、水蒸気ではないでしょうが、もしかすると、王子とお姫様の目がなぜか涙で濡れていて月が朧に見えたのかと、涙に曇る月をうたった古歌などを思い出すと、そんな気がしないこともないが、はたしてどんなものなのでしょうか。

二人については、最後に「対の駱駝はとほとほと。沙丘を越えてゆきました。黙って、越えてゆきました」とあり、間もなく消えて行ったようです。ここに「対の駱駝」と言われているから、あらためて振り返るとこの詩の中にいろいろな対が出てくることに気付かされてきて、それは何だろうとか、対というものに対するこの作者の、この詩を通して表そうとした気持ちと、さらにその気持ちを生んだ背景に何かありげな感じがしてきます。

それは作者の強烈な悲恋体験ではないかと思われる方もいらっしゃるでしょう。そして、事実それがあつたらしいことが確認できます。対になつた自分と彼女が、とほとほとであれどうであれ、とにかく一緒に、ほかの何者も受け入れない特別な世界をつくって生きていこうとしたけれども、それが引き裂かれた。二人は離ればなれにならざるを得なかった。そういうつらい青春体験が佐々木さんにはあつたみたいです。

歌には、結ばれた二人が黙々と遠ざかって行きますが、佐々木さんとその恋人は黙って運命を受け入れ、離れ離れになつたとすれば、この二人からすると、歌の中の二人は、羨ましい、あるいは望ましい形ということになるでしょうね。たとえ前途にいかなる運命がまつているにせよ。そ思つて読み返すと、なかなか迫ってくる末尾の歌詞です。「沙丘を越えてゆきました。黙って、越えてゆきました」。この「黙って」というところで、あらためてこの歌の中には一切音が入っていないかしたことには気付きます。静かな夜のじまの中で一対の男女が黙々と移動していくという。何という寂しい風景だろうということになります。二人にとつては、すでに言葉の必要もない至福と充実の中にいるのかもしれません。

さて、それはそれとして、さつきちよつと一部お話をしかけた、この歌の成立と背景、それから普及に関して、触れておきます。これが日本人なら誰でも知る歌になるにはどういう歴史の流れがあったかということとをあらためて考えてみると、この歌は昭和七年にレコードになっていくんです。大正一二年にはまだ詩とメロディーはあったけれども、それが一般化するにはほど遠かった。これはもちろん録音などに関する技術的な問題もあったんでしようけども。技術革新も格段に進んだ昭和七年にこれがレコードになり、爆発的に売れ、全国的に普及していきました。そのきっかけとなった昭和七年はこの歌の爆発的な普及とどう結び付くのか、何がその後ろにあったのかということが気になります。

それで、資料の二枚目に目を移していただきたいわけです。これはあの歴史年表から昭和七年、昭和八年にかけてを切り抜いたものです。取りあえずこの中で注目すべきなのは、昭和七年の日本が非常に暗い年であることです。迫りつつある面倒な事態、昭和一六年の開戦、二〇年の終戦に至るあの嫌な時代への流れがぼちぼち始まっていく。車で言うところ、セカンド、サード、トップというふうには危機がどんどん深刻化していく中で、大震災から始まる重苦しい不況の時代がローだとすると、昭和七年辺りからセカンドということになるんでしょうか。いろいろな忌まわしい事件が起こっておりますね。この辺のことは昭和史に多少とも通じた方は、ああ、昭和七年はあの年だということに思い当たられるかと思うんですけども。

その不吉なあの時代が進行する中で、特別この歌の普及と結び付いたのは五月九日の心中事件なんです。歌が作られたのはずっと前ですから、これにヒントを得て加藤まささをさんが歌を作ったわけでは勿論ない

んですけども、歌を聞いた人がこの事件のショックと重ねて「月の沙漠」を聞いたり歌ったりという、そういうことで普及がより促進されたのではないかというような意味で申し上げているんですけども。

神奈川県坂田山というところで、慶応の学生と美しい、上流のある女性が心中した。心中したけれども、検死の結果、二人はいまだ肉体関係を持つに至らなかったという、当時の言葉で言うと純潔を貫いたというんでしようか、そういうことで非常に人々の感動が甚だしかったわけです。「二人の中は清かった」というフレーズを持つ歌でこの心中事件は人々にとても大きな感動を与えました。

ところが、この心中事件はにとんでもない後日譚がありました。墓守の男があまりの美しさに心を奪われて女性の死体を掘り起こし、それを自分のものにしてしましました。その男が死体の安置場所として選んだのが砂浜だったのです。そこで美しい死体に見とれ続けているうちに、逮捕されて事件が落着いたというようなことがあって。そのときの心中の印象と、それから死体の新たな安置場所としての砂浜を新聞記事を通して知った人は、何となくこの「月の沙漠」の風景とそれを結び付けながら、また新たな違う角度からこの歌に感動し直したりというようなことがあったことでしょう。これに関しては、作詞者の悲恋体験とともに、合田道人さんの「童謡の謎」という本に詳しく書かれてあります。

さらに、そのもう一つ同じところに、もう一方の文化的な現象として、歌とか映画とかドラマの世界で、砂漠が日本人の心をつかんでいたことも歌の普及に関係があったと思われまします。これは大陸に満州国が成立したり蒙古への関心が広がったりというようなことから砂漠のイメージの一般化してきたことに伴ってでしょう。か、アフリカとかアラブの砂漠

をめぐっているいろいろな映画が輸入されて、それがことごとくヒットしたということも背景になっているでしょう。

その中の一番大成功を取めたのが、「モロッコ」という作品なんです。しかも、この作品は日本人が見た、音声を伴った最初の映画だったというところで、昭和五年の日本人はこれでまた砂漠の世界に心を奪われながら、そのモロッコの一角に繰り広げられた悲恋の世界とこの歌を重ねて新たな興奮にひたつたというようなことがあります。

この辺でちょっと気分転換にその「モロッコ」の有名な最後のところを見ていただきます。世界の果てと言うべき、砂漠にほど近いアフリカの一角で出会った歌姫とブレイボーイが、これまでの自分たちの恋愛遍歴と今回の自分たちの関係はどうも相当違うらしいということで、非常に驚き、また高揚するものの、二人はやがて別れていくんです。男は兵隊に所属しており、やがて号令が掛かって新しい戦地に向かって出発していくことになります。女性は歌姫としてそこである紳士の求愛を受けて人生の再出発が図れる立場となっています。

二人は決別せざるを得ないわけですが、歌姫はそれに耐えることができなくなっていました。で、外人部隊の隊列を追うために、町はずれから出て砂漠に向かって出発しようとし、ハイヒールを脱ぎ、何と裸足で砂漠に入っていきます。この、靴を脱ぎ捨てるヒロインのというのはその後のいろいろな映画に繰り返し使われています。その元になった名場面とそれに至る部分をちょっとご覧いただきたい。

さらに、その映画の終わった後で、もちろんエンドマークが付き、それが終わった後で「パラマウントピクチャー」というクレジットタイトルが出るんですけど、それがしばらく続く中で、耳を澄ませると砂嵐の

音が聞こえています。つまり、だんだん時刻が過ぎ、やがて彼らの前に砂嵐が待っている。さあ、彼らはどこへ行くのか、無事生きていけるのか、男と女は再会できるのかできないのか、みんなでかたずをのんで送りましょうという、そういう終わり方になるんです。そこをちょっと見ていただきました。時間的には七分ぐらいだと思います。ちょっと残り時間が厳しくなってきました。じゃあ、お願いします。

(ビデオ)

今ちょっと出てきた女性たちは、いわゆる従軍慰安婦ですか。ジブシーの女性たち。その一人に身をやつして、どこまでもできるだけ彼のそばにいようという決意を持って、靴を脱いでこれから出発していく。

(ビデオ)

いかがでしたか。あらためて思い出してみると、日本人の愛したというか心引かれた映画の中には結構砂漠の世界が多くて、資料の左側に文藝春秋から出た『ラブシンベスト一五〇』という本の中からの切り抜きを入れておきましたけども、この上のほうを見っていきますと、ベステンの中に三回出てきますよね。「ローマの休日」がイタリア。「望郷」がアルジェリア。それから「哀愁」、これはロンドン。「第三の男」はウィーン。「旅情」がベネチア。それから「カサブランカ」。「男と女」はパリ。「誰が為に鐘は鳴る」はスペイン。「モロッコ」。「恋人たち」はパリ。「望郷」「カサブランカ」「モロッコ」と・砂漠地域に縁のある日本人好みの名画が多いということが浮き彫りにされます。そのことと「月の沙漠」を人々が愛好したことの、どっちが先でどっちが後かは一概に決められませんが、何か深い関係がありそうです。

さらに、歌に目を転じますと、『マイ・ラスト・ソング』の一番頭に

「アラビヤの唄」というのが載っていますね。これがこの本の長く続く連載のプロローグになっているんです。具体的に申しますと、久世さんの親友だった小林亜星さんという作曲家で、「寺内貫太郎一家」の主人公を演じたあの人に対して、久世さんが、君にとつてマイ・ラスト・ソングは何だつて聞いたら、なぜか彼は非常に深刻な表情で、即答を避けたと書いてあります。音楽家ですから当然何千、何万という歌を承知しており、かえつて選択に時間がかかるという事情もあつたでしょうけども、急に言われても答えられないと言つて、かなり時間をかけた後でやっぱりこれだと言つたのが、この「アラビヤの唄」だつた。この歌を聞くと、あるいはちよつと口ずさんでみると、やはり懐かしい自分の少年時代がよみがえつてくるということです。

彼は昭和七年の生まれですので、この「アラビヤの唄」がヒットした時期のほぼ終わりごろなんですけど、まだそのブームが続いていたところに幼い彼の耳に聞こえ、耳に残つた「アラビヤの唄」が自分にとつてのラスト・ソングだという。その歌をあらためて聞きながらこの世を離れていこうというふうに思つたというのです。それを受け止めた久世さんは、必ずやその親友との決別のときに「アラビヤの唄」を聞かせようと思つている、と書いたんですけども、あいにくなことに久世さんのほうが先に亡くなつてしまつたので、それは果たされることがなかつた。

そういう思い、そういう体験の持ち主は、昭和一けた生まれの人の中には意外に多いのではないかと思います。ひよつとしたら今日、この中にも何人かそういう方がいらつしやるのかなと思つたりしておりますが、いかがでしょう。「アラビヤの唄」がはやつていたころに物心ついた方とか、あるいは「モロッコ」。これは何度も何度もリバイバル上映

されていますが、その都度映画館が延々長蛇の列になつたなんていうのをご存じの方は、何で日本人は砂漠が好きなんだろう、それからラブストーリーに砂漠がなぜ似合うんだろうと思われるのではありませんか。それぞれのラブストーリーの中に、彼らがどこから来て、どこへ行くのかというようなモチーフが感じられてきます。さっきの「モロッコ」の男女は、どこから流れてきたのか分からないけれども、それぞれ、自分にとっては生まれて初めてのような恋をした。そのことへの感動、興奮、そして恐怖がこの「モロッコ」の中核になっているわけです。

その中の重点的なせりふが、その写真の左側に書いてあります。「もう帰つたほうがいいわ」と言つて、もうこの辺で二人はばらばらになるほうがいいというふうには女は提案するんです。「私、あんたが好きになり始めたらしいから」。急に心配になつた。これまでの自分がどこかに行つてしまひ、違つた自分がだんだん見えてきた。そのことをどう受け止めたらいいのか、これから自分がどうしたらいいのか分からなくなり始めた。その恐れを受け止めるよりは、この辺で安全な時間の中でも自分たちは分かれて戻るほうがいいんじゃないかしらというようなことを短いせりふで言うんです。この表情のマレーネ・デイートリツヒもなかなかかわいらしくてすてきです。

それから男のほうはゲイリー・クーバーですけども、「実はなア、今までも女にはずいぶんいろいろなことを言つてきたが、お前には誰にも言わなかつたことを言いたい」と言う。どういう言葉かつていうと、「一〇年前に逢いたかつた」と、こんなことを言うんです。こういう殺し文句がこの映画の中にたくさん出てきて、その一つ一つによつて、暗い映画館の中の観客はどよめいたり、うなずいたり、首をひねつたりして、な

なかなか息詰まるような時間が「モロッコ」一時間四〇分の上映時間の中に展開したのだそうです。

そういったことが、さつき名前が出たような、あるいはその他多くの映画を通して繰り返し繰り返して、それらを通して男女の物語を追体験しながら、月夜の砂漠という形でくくられている遠い別世界の、自分とは無関係でありながら、心の深いところで結び付いている彼と彼女の傍らに自分を置き、それと自分を結びつけながら感動する人がいつの時代にもいたことでしょう。横山やすしとか森繁さんとか、それから久世光彦さんも「月の砂漠」が大好きだそうですが、そういう方々を主軸とする世代感覚がつけられていったのであろうとおもいます。

それは、肝心のこの歌の歌い手とか、鑑賞者として予定されていた子どもたちのあざかり知らない世界ですよ。また、小さな子どもたちが全く違った観点、違った感覚でこの歌を喜んだり興奮したりするというのはまた別の問題ですけども、とにかくそういうのとまた違った形で日本人の心の中に歌い継がれてきた中で、遠い世界の砂漠の風景は全く生動的には関係のない日本人の中に大きな変化を刻み続けてこんにちに至っているのではないかと思います。

その風景が一体もともとどこから発生したのかというところで、今日の房総の歌のテーマになります。ご承知の方が多いと思いますが、この歌を作った人は二人いて、作詞した人と作曲した人です。作詞の加藤さんは自ら証言していわく、御宿での日々の中からこの詩は生まれたとのこと。それを喜ばれた御宿の方々には記念の像を造ったり、「月の砂漠」の記念館を造ったりし、それに惹かれた全国各地の人も、折に

触れてあそこに出向いて散策して、駱駝に乗った王子とお姫様の像の立つ砂浜で、遠い異国を思つて風景に見とれながら感動し続けている。

私はついこの間も、放課後にこの大学からちよつと行つてきたんですけど、一時間で行けますね、ここから。極めて簡単に行けますので、もしいまだ御宿の記念館と像をご覧になったことがない方は行かれたらよろしいかと思えます。月夜の晩が一番だと思えますが、私が行ったのは、どんよりした午後だったので、感動はいまいちでしたけども。こんな近いところにこの歌を生んだ空間があるということに、あらためて感動したりしました。

実際には、うたにゆかりの地があそこかどうか、異説もないことはありません。加藤まささをさんは、生まれたのが静岡県藤枝市なんです。藤枝市の外れにやはり砂浜があつて、その辺での遠い幼少の日々を懐かしみながらこの歌をつくつたのではないかという説もあります。静岡県の人たちはおおむねその説を支持しているのでしょうね。当然、千葉県の人はみんな御宿説に加担しているはず。どっちが本当か分からないけども、加藤さん自身は藤枝ではなくて御宿だつておっしゃっているから、彼の言うことが一番確かだろうとも言えるし、いや、本人の言うことは案外怪しいとも言えるんですね。つまり、そういう言い方で何か隠したいことがあつて、藤枝と彼とのかかわりの中に知られたくない、触れられたくない何かがあるのではないか。その辺が先ほどこちよつと触れましたような異性ととのつらい、忘れない記憶があつたのかもしれない。藤枝市にも、小学校の校庭か何かに記念碑があるらしい。まだ私、行こうと思ひながら未確認なんですけども。

一方で、この歌にメロディーを付けて、自分で楽譜とか楽器を持って

日本中を駆け回って歌ったりして普及に努めた佐々木さんという方は、あらためてびっくりしたのですけども、生まれが兵庫県の高砂というところなんです。高砂というのは高い砂と書く、やはり砂浜で知られた、古くから有名な関西の名所であった。その彼が就職したのが浜松であったのも注目に値します。浜松の師範学校の先生だったらしい。浜松も砂丘で知られる地ですから、作曲した側にも二つの砂との記憶があり、作詞の加藤さんのほうにも二つのゆかりの土地らしいものがあり、それらが合わさってこの詩の歌のイメージがつくられていて。それがまたある意味ではこの歌の魅力を裏打ちしているのではないかなというふうに思いながら、この二人のこの歌をつくったときの成立事情と申しましようか、どうしてこの歌ができたのかとか、できた後何があったのかということは、資料の三枚目に「月の沙漠記念館」で手に入れた冊子の見開き二ページの今日の資料をこの中に入れておきました。

それをご覧いただければ、一番有名な「月の沙漠」をめぐる物語として一番世間に普及している基本的な内容が尽くされていると思いますので、今日はそれに譲ってあえて中心的な、よく知られた「月の沙漠」をめぐる加藤まささんの物語のことは省略して、あちらこちらに話題を広げながらとりとめのないお話をこれまで続けてきたわけです。

大体時間がまいりましたので、一応今日の「月夜の田んぼ」から始めて、遠い遠いアラブやアフリカに行ったかのようにであり、実際にはここから一時間行けば着く御宿の砂浜だった模様ですけれども、そこに近接する大学で、不朽の日本の名曲「月の沙漠」をめぐるお話を、今回の「歌のころと房総」の大正、昭和期の話題といたしました。まことにご清聴をありがとうございます。(拍手)

【司会】 三木先生、どうもありがとうございます。時間が五分ほどございますが、質問等ありましたら……さい。

【三木】 一つ、極めて重要なことを忘れしました。さっきの時代背景の中で、この歌をくつきり著名にした決定的な出来事は、昭和八年の、この年表の一番下に書いてあることです。皇太子生誕。なかなか生まれてこなかった天皇の跡継ぎとなる男の子。それがようやくお生まれになった。先立て何人か生まれたのは女性たち、姫宮ばかりだったため、皇子の生誕を日本人はこぞって待望していて、ついに昭和八年の十二月二三日に男の子がお生まれになった。そのときの感動、興奮、どよめきが、先ほど言いました暗い危機の時代に向かっていく日本の昭和一けたから二けたにかけての最も明るい出来事だったわけです。そのことがこの歌の中の王子の姿とか重ねて、日本人を興奮させたかもしれない。これについても先程ご紹介した合田さんの本に指摘があります。もちろん生まれたばかりの皇子に、隣にいるヒロインはいないわけですけども、将来その隣にどんな人が来るだろうと思いつきながら、昭和期を日本人が生き続けていって、その後のめでたい成り行きを見ることになりました。

そういう昭和期とこういう一つの歌の結び付きを考えると、これはもちろんこれだけではなくて一つ一つの歌には歴史があり、その歴史は国民が等しく知っている歴史と、それから個人の歴史と、その二つを結び付けると歌の意味とか味わいはまた格別のものになるはずで。以上、補足でございます。

【司会】 ありがとうございます。いかがでしょうか。この補足も含めまして。

【三木】 もし皆さんでしたら、ラスト・ソングはどういう歌になさるで

しょうか。あと五分、今日の午後三時三分に死ぬというふうに今決まったとした場合に、最後にあれを聞かせてってリクエストしたい曲。考えているうちに五分たっちゃいそうですね。(笑) もうちょっと時間の余裕のあるときにお考えいただけだと思いますけども。

【司会】 先生ご自身のラストソングは何でしょうか。

【三木】 その日その日の気分で違うんですね(笑)。今日はあれだなとか、日替わりの感じで、その都度ラスト・ソングというテーマは私の中でいつも動いているようです。

後記

当日、この質問に対して終了後に思い出したのは幼少年期に聞き、歌った唱歌「青葉繁れる」であった。南北朝の動乱期の楠正成父子の永訣の場面を扱った有名な曲。

戦中世代なので、これに対して人ごとならぬ思いをしつつ歌ったものである。これをなつかしむ人はことのほか多いのではあるまいか。

【質問者一】 「月の沙漠」をつくった時代というのは、大正ロマンから移っていく時代のようにも思うんですけど、一言で言うとも明るい時代ですか、暗い時代ですか、真ん中ぐらいですか。

【三木】 明から暗への転換が敏感な人にははっきり感じられ始めたころじゃないでしょうか。ただ、大正時代の文化の輝きとか彩りはまだはっきり残っていて。その辺のことが金とか銀とかという色彩に端的に表れているのかなと思うんです。

【質問者一】 でも、何か非常に物寂しい感じの詩ですよ。

【三木】 はい。本当に物寂しくして。

【質問者一】 金と銀はあっても、何かだんだん暗くなっていくという、そういう気がしますけど。

【三木】 本当にこの金と銀がなかったらもともと暗かったんだと思います。それをかろうじて救っていて、それが上空の月の光と反映し合って、なかなかこれはすごい風景ですね。その風景のつくり方の中には、お配りした資料に入れてある西条八十のカナリアの歌が影を落としていると思います。「歌を忘れたカナリア」の歌。月夜とか金銀が出てきています。これをさりげなく引用しているみたいですね。その辺も、もし時間があればお話ししたかったですけど。

【質問者一】 どうもありがとうございました。

【質問者二】 ここで「白の含むもの」ということで高橋治さん、先ほどご紹介がありましたけど、この方は大綱に住んでおられて、千葉高校をご卒業になったんですけど、後に松竹の映画監督をなさったりした著名な人ですけど。この文章は出典は「白の含むもの」。出典はいつごろの時代、どの本に載っている物でしょうか。

【三木】 これは、朝日新聞社から出た『色の歳時記』。写真をたくさん使ったグラフィックな。ムックついでいうのでしょうか、美しい写真がふんだんに出ている本です。その中の一ページの中の一部を切り取って使いました。この高橋さんは千葉県出身ですか。

【質問者二】 出身じゃなくて、母親が大綱に在住の方でございまして。その関係で大綱から千葉高へ通っております。昭和四年生まれぐらいだったと思いますけど。それで東大の文学部へ行って、松竹へお入りになって監督になられた。

【三木】 松竹映画が一番若々しく元気だったころの助監督、そして監

督。

【質問者二】 そうですね。ヌーベルバーグのちょっと前ででしょうか。

【三木】 その中ではやや世代的に上ですね。

【質問者二】 そうですね。

【三木】 おっしゃるとおり。この大学に來ている篠田正浩監督よりもちょっと年上。大島渚とほぼ同じぐらいだから。

【質問者二】 小津安二郎と関係が深い人です。

【三木】 この方、小津安二郎を扱ったエッセーをたくさん書いていますね。『絢爛たる影絵・小津安二郎』など。

【質問者二】 素晴らしい本です。

【三木】 全く同意見でございます。他にも文学的エッセーをたくさん書いておられて私の好きな作家のひとりです。

【司会】 まだあるかもしれませんが、時間になりましたのでこれで講演会を終わらせていただきたいと思います。もう一度先生に拍手を願います。(拍手)

(みき すみと・

本学国際人文学部国際文化学科客員教授、本センター所長)